
対抗的記念碑の試み

— ブリストルからハンブルクへ —

柳澤 有吾

奈良女子大学研究院人文科学系教授

1 章 はじめに：課題としての銅像撤去

2020年のジョージ・フロイド事件をきっかけに大きな広がりを見せたBLM (Black Lives Matter) 運動であるが、出発点は2012年フロリダ州の事件に遡るとされる。刑事司法制度における差別的な取り扱いばかりではなく、ふだんから頻繁に職務質問を受けたり不審なまなざしを向けられたりすることも含めて、社会生活全体を貫いている差別構造に対する告発でもあった。それはまた、公共空間に設置されている銅像のような歴史的対象にも向けられた。日本ではアメリカ南北戦争における南軍のリー将軍(奴隷制廃止に反対した)の銅像撤去のニュースが広く報道されたが、特定の国や地域に限られているわけではない。

空間的のみならず時間的な広がりにも目を向けるならば、記念碑や記念像の政治的機能やそれに対する動きはこれまでもさまざまなかたちで示されてきた。直近ではシリアのアサド政権崩壊に伴う大統領像の倒壊の様子が繰り返しニュースで放送され、2003年のイラクでサダム・フセイン像を引き倒す映像も記憶に残るものであった。さらに遡れば、ソ連崩壊後のマルクス・レーニン像撤去が象徴的シーンとして歴史に刻まれている。権力者の退場とともにその「しるし」も運命をとにもするのは当然と言えば当然であるが、しかし、いま問題になっているのは、単なる力関係の変化ではない。権力者に対してというよりは、むしろ社会全体としての認識が問

われているのであって、それに対する異議申し立てを含んだ抗議運動であり、銅像撤去の動きである点に注目すべきである。すなわち、本来あるべきではないものがずっとありつづけたということ、それを支えてきたのは絵に描いたような差別者ではなくごく普通の人々であり、その無頓着さ・鈍感さであった。しかし、そのことに気付いた、もしくは、気付かされたからといって、直ちに銅像を撤去すればよいのかというと、そうとも言えない。平等や友愛を謳うこの社会で、いまのいままでそのような差別的記念像が大きな顔をして人々を見下ろしていたという事実をなかったことにしてしまっただけではならないとも思われるし、毀誉褒貶相半ばする場合には片側の評価だけでその扱いを決めてしまうことに迷いも生じるだろうからである。

もちろん、撤去した場合でも、撤去したというその事実がなくなるわけではないし、なにより、撤去によって、そこで下された否定的評価を明確に示すことができる。しかし、同時に、なぜそういうことがありえたのかということや、現在からみたときながら問題であるのかということは見えにくくなる。説明板で撤去の経緯や撤去前の状態を間接的に示すことなどはできるとしても、当の「それ」はもはやそこに存在しない以上、事実の重みは失われ過去へと押しやられる。さらにもっと問題なのは、撤去したことで問題が解決されたという外見が作り出されることである。たしかに「それ」は撤去されたのであり、そのかぎりでのその案件については片付いたこ

とになるのかもれない。だが、問題の根幹にあるものは当面問題になっているものを視野から取り除くという方法で除去できるわけではない。それだけでは済まないはずなのであるから、その事実を隠蔽しないことも重要である。しかし、だからといって、撤去を取りやめてそのまま存続を図った方がよいのかというと、たとえ補足説明を付したとしても、否定すべきものを維持することになるので、それはそれで受け入れがたい。そのままにしておくわけにはいかないが、はじめからなにもなかったかのように事態を風化させたくもない、という堂々巡りに陥るようにも思われるのである。

妥協案として考えられるのが、博物館に寄託してそこで展示するというやり方であるが、これも預けさえすればよいというものではなく、そこでの扱いが問題になるし、こんどは「博物館」という社会的制度の持つ性格がそこに展示されるものの意味付けにも影響を与えることになる。博物館とはなにか。それは過去の遺物を展示する空間なのか、あるいは過去と現在の対話の場なのか。そもそも「展示」あるいは「観覧」とはいかなる行為なのか。博物館とそこを訪れる観覧者のそれぞれがどのような存在であると想定され、どのような役割を果たすことが期待されているのか、実際の展示の仕方はどうするのか等々、多くの問いと向き合わなければならない。もちろん、そこには課題だけでなく可能性も認められるのであって一概に否定されるべき方策ではないが、いずれにしても、それは現在ある場所からは撤去することを意味している。それに対して、その場での存置派は、新たな銘板の追加など何らかの条件を付けることによって自己の立場を単なる守旧派から差異化しようとするであろうが、屈折した論理は理解されにくく、かえって中途半端な印象を与えてしまう可能性もある。像を動かさないというだけで保守的な差別主義者とみなされるかもしれない。そう考えると、撤去に傾かざるを得ないようにみえるが、しかし、そこには「正しさ」を名目とした忘却願望、記憶の重荷からの解放欲求が隠されているかもしれないのである¹⁾。

この複雑な問題を考えるうえで興味深い事例を提

供してくれているのが、イギリス西部の港湾都市ブリストルである。本稿では、まずはそこを出発点に、銅像や記念碑への向き合い方について考えていきたい。

2章 ブリストルのコルストン像撤去とバンクシーの提案

BLM 運動は英国にも広がり、1万人が参加したと言われる2020年6月7日のブリストルのデモでは、慈善事業家として有名で晩年には国会議員も務めた17世紀の商人エドワード・コルストンの像が引き倒され、ブリストル港に投げ入れられた。その名を冠した学校やコンサートホール、通りなどが残っている地元の名士である。除幕式のときの写真を見ると、死後174年も経ってからの銅像建立であるにもかかわらず、集まった人々で広場は立錐の余地もないほどであった²⁾。台座には「もっとも高潔で聡明なわが町の息子たちのひとり」とある。その銅像がなぜそのような目に遭うことになったのか。ほかでもない、「王立アフリカ会社」を通じた奴隷貿易で財を成したレイシストの像だというのがその理由である。

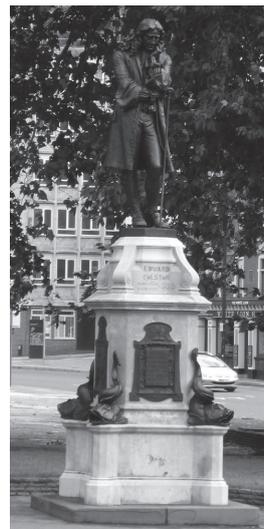


図1 引き倒される以前のコルストン像
(By William Avery, CC BY-SA 3.0 (http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/), via Wikimedia Commons)

しかしながら、コルストンについて、「フィラン

ソロピストか、レイシストか」の論争が起きたのは今回が初めてではない。ペンキで台座に「奴隷商人」と落書きされた1998年の事件はメディアで大きく報道された。文献的にも、100年以上前に出版された伝記で奴隷貿易への積極的関与がすでに指摘されていたし³⁾、1973年には『ブリストルのショッキングな歴史』と題する本の中で、ブリストルが奴隷貿易を含む三角貿易で富をなしたことや、コルストンがその莫大な資産を奴隷貿易に繰り返し投資していた事実が明らかにされ、コルストン学校の生徒たちが毎年彼の日を祝っていることに対しても疑問が呈されている⁴⁾。また、近年の話としては、2017年にコルストンと奴隷貿易との関係を示す銘板の設置や銅像そのものの撤去も提案されたが、いずれも多数を得られずに立ち消えになった。こうした過程のひとつひとつも興味深いのだが⁵⁾、いまは現代に焦点を絞ってみていくことにしたい。

投棄された銅像は市議会によって4日後に引き上げられ、保管されていた。その後、2021年6月から2022年1月まで、ブリストルの博物館 M shed の展覧会「コルストン像：次はなにか?」において、損傷も落書きもそのままに、引き倒された姿で展示された。この美術館はブリストルの歴史や産業、文化などに関する展示を行っており、1階の「ブリストルピープルギャラリー」にはブリストルの大西洋横断奴隷貿易への関与を扱うコーナーも設けられているので、コルストン像の展示には相応しい場所である。また、入場無料である点も見逃せない。美術館・博物館の敷居が高くなっている理由のひとつは、アクセスが制限されていることにあるからである。たんなる骨董品の収蔵庫になるか、それとも歴史とともに「いま」が息づいている場所となるか、基本的なコンセプトや展示内容・展示空間づくりなど様々な要素がかかわってこようが、物理的・経済的な意味でのアクセスのしやすさも大切な点である。施設がいわば街路の延長線上にあるようなイメージで気軽に訪れることができるなら、日常生活やコルストン像の置かれていた広場とも文字通り地続きのものとして捉えられる可能性も高くなるだろう。

コルストン像と台座の扱いについては公開アンケート調査が行われ、約14,000人が回答した。結果の詳細は『「われらブリストル」歴史委員会報告書』（以下『報告書』と略す）にまとめられている⁶⁾。ブリストル在住者の80%は像をブリストルの博物館で展示すべきだと答えたので、2022年4月に閣議決定が行われて、像を長期的に M shed に展示することとなった。そして2024年3月、抗議活動の歴史全体に焦点を合わせた展示が始まり、そこにコルストンの像も——横倒しのままで——組み込まれている。ただし、ブリストル在住者の10%強は像をいったん元の台座に戻して協議や採決に付すことを、また、4%程度は像の破壊を望んでいたことも付記しなければならない。一方、空所となった台座の将来に関するアンケートでは意見が分かれたものの、ブリストルの回答者の大多数は、更新された銘板が台座のそばに設置されることを希望し(71%)、台座が芸術作品の一時的な展示場所として使用されることも望む意見も多い(58%)。これにはロンドンのトラファルガー広場にあるいわゆる「第四の台座」が同様のコンセプトで運用されていることも影響しているとみられる。アンケートのコメントのなかには、一時的展示場所として利用しつつも「一定期間は台座を空にしておく」というアイデアもあり⁷⁾、「不在」もまた重要なモチーフになりうる事がわかる。

このアンケートでは地域・世代・民族別のデータ整理もなされており、個別の意見も掲載されているのでさらに細かく検討する余地があるのだが、いまはこれ以上立ち入らない。それよりも、博物館行きか廃棄かというここでの選択肢には含まれない、まったく別のオプションがSNSでは早い段階から提案されていたことに目を向けたい。提案者はブリストル出身のグラフィティアーティスト、バンクシーで、銅像引き倒しの2日後、自身のインスタグラムに【図2】のようなドローイングを投稿した。そして、コメント欄には以下のような文章が載った。

ブリストル中心部にある空の台座をどうすればいいだろうか？コルストン像がなくなって寂

しく思う人もそうでない人も満足できるアイデアがこれだ。像を水の中から引き上げて台座に戻し、首にケーブルを巻きつけ、そして、まさに像を台座から引きずり下ろそうとしている抗議活動参加者の等身大の銅像制作を依頼する。これでみんなハッピー。すばらしい記念日になる。



図2 バンクシーのドーイング

実際には、「コルストン像がなくなって寂しく思う人」は、このようなかたちでコルストン像が残されることを望んではいないであろう。当時奴隷商人であったことがコルストンの評価を下げる理由にならない——各時代にはその時代の倫理があり、その枠を超えられなかったからといって誰も責められるべきではない——と考える人はもちろん、そのこと自体はたしかに問題だが、それも含めて様々な側面を有する人物として捉え直すのであればコルストン像そのものは——たとえば必要な情報を記した銘板を付すなどしたうえで——残してもいいのではないかと考える人もいる。また、内容ではなく手続きを重視して、まずは原状復帰が前提と考える人も少なくない。反対派にしても、台座から引きずり降ろそうとしている場面なのだから賛成してもらえるかといえそうとも言えまい。形はどうあれコルストン像がそこになお存在すること自体が許しがたいと考える人もいるし、引き下ろそうとする途中を描くような中途半端さのせいで、「郷土の恩人」コルストンの残滓がいつまでも残り続けるのではないかと危惧する人もあるだろう。したがって、そうした人々まで含めてバンクシー案がほんとうに”ハッピー”にしてくれるかどうかは疑問であるのだが、しかしながら、文字通りの意味で万人が納得できるかどうか

かということよりも、それらの意見に反映されているような銅像をめぐる意見の多様性と緊張関係が表現されていることのほうが重要であり、その点は間違いなくひとつの長所である。たとえ世論の多くがいまは撤去に傾いていたとしても、コルストンをこれまで台座に載せていたブリストルの歴史は銅像とともに単純に撤去できないし、撤去されたことにしてしまってはならないであろう。

実際、コルストン像をめぐる近年の歴史を紐解いてみると、赤いペンキを掛けられたり、毛糸で編んだ足枷をつけられたりと、これまでも銅像はさまざまな目に遭っている。それをヴァンダリズム（蛮行）のひとつで片付けるのは適切ではない。攻撃的ではあってもそれはなおある種の対話と呼んでもよいようなもので、実際に対応に当たるのは当局であるにしても、そこで問いかけられているのはコルストン像とその背後にある都市の歴史そのものである。しかし、今回の出来事で論争的存在をめぐるそのような対話はもはや不可能になった——当の出来事も、一方から見れば非常識な騒動や器物損壊、他方から見れば正常化ということになる。対話だのなんだの、そんな悠長なことを言っていられるような代物ではないのだというのが反対派の言い分であろうが、にもかかわらず、もしくは、そうであればなおのこと、粘り強く対話的關係を続ける可能性もあったかもしれない。たしかに、撤去を前提に考えた場合には、博物館での展示はけっして悪くない選択肢である。しかし、そのようにして展示されてしまうと、そこにあるのはもはや過去の記録にほかならず、アクチュアルな対話は不可能になる。対話の記録とのさらなる対話は可能であり必要でもあるが、「その時」と「いま」、「そこ」と「ここ」とを媒介する工夫なくしては、「展示物」の壁は越えられない。現在は博物館の正式な展示の一環として再び表舞台に戻っているが、それが最善かつ唯一の方策だとは言いきれないのである。

さて、BLM 運動との関連でがぜん注目を浴びることになった銅像であるが、一步引いて考えてみると、銅像や記念碑の類はふだんそれほど注意を惹く存在ではない。それどころか、設置された時点から

忘却のプロセスが始まっているのが常で、たいていすぐに風景の一部と化して忘れ去られていく。「記念碑ほど目立たないものはない」というミュージルの言葉⁸⁾がよく引かれる所以である。そのように目立たない銅像や記念碑がなぜ撤去運動の対象になったり、港に投げ込まれたりすることになったのか。まさに風景の一部になるような仕方では差別を「偉業」の陰に隠すようにして温存し、自然化し、日々再生産し続けてきたことが白日の下に曝されたからにはかならない。銅像がそのようにありつづけること自体が、現在進行形で、そこに記されてはいない人々の尊厳を傷つけている。歴史学者のコゼレックは記念碑を（死者だけでなく）生き残った者にもアイデンティティを提供するものとみなしたが⁹⁾、そのような意味も含めて、記念碑は歴史の証言者や過去の遺物に尽きるものではなく、むしろその時代を受け止める後続世代の表現課題である。そのつどの時代の証言者であると同時に現在を映す鏡なのである。

美術史家のワイゼンバークは、記念碑との向き合い方について、同業のシュプリンガーの言葉も引きながらつぎのように述べている¹⁰⁾。

「価値が移り変わり眼差しが変化して、記念碑は疑問視され、不快なものとなり、もはや維持できないもの、それどころか『危険な』もの、脅威と感じられるとき、記憶や名声のモニュメントは躓きの石となる」¹¹⁾。[...] そのように「時間的政治的变化や我々の経験が追い付き追い越してしまった記念碑を取り壊す」¹²⁾のも理解できるように思われる。しかし、時の流れのなかで繰り返し示されるのは、歴史をパールで取り除くことはできないということである。記憶は人々の体のなかで生きつづけている。そのような「躓きの石」に人がどう出会うのか、ほかの可能性を探らねばならない。

歴史を視野から取り除くような形で抹消するのではなく、それでいて単純にそれを肯定しているわけではないと示すことが課題であった。考えてみれば、

言語なら難しいことではない。問題を含んだ内容を提示した上で、あらためてそれを否定してみせることに何の困難もないからである。また、書字レベルで考えてみても、跡形もなく消して別のもの書き換えるのではなく、下地が見えるような形で——たとえば取消線を付したうえで——上書きしてみせることもできる。たんに否定を示すのであれば×印をつけてもよい。しかし、銅像そのものに×印はつけられない（無理に付けても効果は薄い）。否定や疑問の表示は言語にとっては容易だが、造形的にはきわめて困難である。それゆえに、転倒や撤去というアクションが一般的な表現方法となっているのである。そう考えるとバンクシーの提案の巧みさがあらためて際立つ。先の引用を受けていうならば、「歴史をパールで取り除く」のとは異なる造形的解答をラフなスケッチによって提示して見せているからである。

しかしながら、これはまったくユニークな試みというわけでもない。彫刻や銅像単体で否定や疑問を直接表現することは難しくても、別のものと組み合わせることによってそれを相対化したり批判したり、あるいは補完したりして、あらたな文脈を敷設することは可能であるし、現にさまざまな形で試みられてきた。伝えるべき内容を記した銘板をあらたに設置するというのもそのひとつのヴァリエーションといえなくもないが、今回のバンクシーの案に匹敵するものとしては、対抗的記念碑（countermonument / Gegendenkmal）を挙げることができる。とくにドイツにおけるそれは、二度にわたる世界大戦を経て過去に向き合わねばならなかった戦後ドイツの「否定」の身振りを表現するものとして、政治的にも芸術的にも重要な取り組みであった。ドイツ全土で興味深い事例をいくつも見出すことができるが、ここでは、ハンブルク・ハールブルク地区の「兵士」像に対する対抗的記念碑設置の企てに注目することにしたい。兵士像自体はコルストン像と同様の銅像でそれほど珍しいものではないが、それに対するアンチテーゼとして追加的に設置された少年像は、その対抗的かつ対向的なありかたにおいて、典型的な形で対抗的記念碑の在り方——その可能性と課題

—を示してくれていると思われるからである。

3章 ハールブルクの「兵士」像

1節 像と台座の詳細

ドイツでは1980年代になってあらためて記念碑が注目を浴びることになった。その理由については必ずしも共通理解が成立しているわけではないが、変化の認識については論者のあいだでも一致が見られる。たとえば、歴史学者のハイデマリー・ウールはつぎのように述べる¹³⁾。

記念碑に関する公共的議論や現代アートへの関心の再燃は1980年代の現象である。ほんの何年か前には記念碑の「終焉」が宣告されていた。時代遅れの、当局が設置した政治的プロパガンダの手段と見なされ、国家社会主義記念碑の洪水によって完全に信用を失っていたのである。[...] 一方で1980年代には「ユートピアを目指すエネルギーの枯渇」[ハーバーマス]と共に、20世紀末の新たなパトスの形として記憶が浮かび上がってきたとされる。将来志向の近代精神の記憶喪失が、新しい歴史主義、つまり「過去への執着」に取って代わられた。これが、ポストモダンの兆候を示しつつ、歴史の次元を社会的関心と学問的関心の焦点としたのである。

この、過去を再吟味する眼差しがハールブルクではかねてより問題となっていた「兵士」像に向けられたのであるが、まずはその様態から確認しなければならない。

ハールブルクのハールブルク地区中心部、聖トリニティ教会前で兵士像の落成式が行われたのは1932年のことであった。逞しい肩に銃を担いで行進する兵士は高さ4m半のブロンズ製で、台座は6mあり、全体で10mを超える巨大な記念碑である。よく見ると兵士の額には包帯が巻かれていて、傷を負った姿を造形したものであることがわかる。それにもか



図3



図4

かわらず前に力強く踏み出す姿はしっかりしており、遠くを見つめる眼差しに揺るぎはない。

台座正面上部、兵士のすぐ足元には、第一次世界大戦の年号1914～1918年が大きく刻まれ、下部には像を造った彫刻家ヘルマン・ホーザイス自身の手になる以下のような文言が記されている。

祖国のために斃れたハールブルク市の2,000人の息子たちに敬意と追悼の意を表す。傷ついた身ながら、いまもかつてこれからも、ドイツは汝のために行動する用意がある。

つまり、「兵士」は第一次世界大戦で敗れ、多くの犠牲者を出し、深く傷ついたドイツである。が、けっして挫けることはなく、明日の栄光のために歩み続けている。「祖国」はドイツ語でVaterlandすなわち「父なる国」であり、戦死した「息子たち」はその父の息子たちである。

正面に刻まれた言葉を受けて、側面には以下のような文言がみられる。

忠誠心は天においても地においても
最初にして最後のもの
それに魂のすべてを込めた者は誰でも
栄誉を与えられるだろう
E.M. アルント

あなたの死者は命を得る
イザヤ書 26 節 19

エルンスト・モーリッツ・アルントは19世紀はじめの愛国詩人で、ここに刻まれた文言は、解放戦争の頃につくられた「友への挨拶」という詩の一節である（出版は1818年）。過去を省みるというよりは未来に向けて雪辱を誓い、そのことによって第一次世界大戦の傷を癒そうとしているようにみえる。注意すべきは、ここでいう「忠誠心」が臣民の君主に対するそれではなく、国民の祖国に対する忠誠心だということである（アルント協会のサイトには、「アルントは一貫して君主支配の終焉を求めて運動し、ドイツの国民意識を擁護した」とある¹⁴⁾）。一方、旧約聖書からの引用は預言者イザヤが復活の希望を語ったもので、戦争での死に対する慰めの言葉としてこうした言葉が引かれる例はほかにもある。ただし、ハールブルクの場合、彫刻家の意に反するかたちで教会側によって押し付けられたもので、ホーザイスの憤懣やるかたない様子の伺われる手紙が残されている（パンフレット『「兵士」：ハールブルクの戦争記念碑史資料』—以下『記念碑史資料』と略す—参照¹⁵⁾）。

戦後ドイツが過去と対決するにあたって、第一次世界大戦は直接の対象ではないようにみえるし、事実、「兵士」像批判に対する反論の中には、これをナチズムや第三帝国以前の話であるとして別扱いしようとする意見もあったのだが、そのような形式的線引きができないことは碑文から十分に伺われよう。以下、対抗的記念碑設置に至るまでの過程を跡付けるために、まずは「兵士」像建立の経緯から確認することにしたい。

2節 「兵士」像の歴史

『記念碑史資料』によれば、「兵士」像設置を主導したのは、在郷軍人会の求めに応じて1925年に設立された「第一次世界大戦で戦死したハールブルク市の息子たちの記念碑建立委員会」である。同委員会には、市長のほか、複数の市政府大臣、ハールブルクの工場長たちも含まれていた。費用は寄付を募ったが、大部分は産業界と在郷軍人会によって賄われた。一方、社会民主主義者は戦争賛美のこの顕彰碑に激しく反対し、そのかわりに戦争による身体

障害者のための療養施設などの建設を要求したが、費用が高むため早々に却下された。

場所については、当初は戦争墓地が適切とされたが、最終的には聖ヨハネ教会の周りを囲む壁のすぐ外側の、大通りに面した場所に決定された。記念碑については複数の芸術家が名乗りを上げ、一方でコンペも計画されたが、委員会はいずれも退け、シャルロテンブルク大学教授で芸術アカデミー会員の彫刻家ヘルマン・ホーザイスに委嘱することになった¹⁶⁾。

当時の教区監督フェルトラップは除幕式の式辞で次のように述べている。「記念碑は戦死した戦士たちの英雄的行為と忠誠心に感謝するものでなければなりません。祖国への愛をもって彼らを悼むのは私たちの義務です […]。これは、わが民族を夜から光へ、十字架から王冠へ、死から新しい命へと導きうるものを私たちの内に目覚めさせ、育もうとするものなのです」¹⁷⁾。

社会民主主義者の新市長は出席しなかったので、前市長が記念演説を行い、つぎのような言葉で締めくくった。「死者にとっては永遠の記憶として、生者にとっては厳粛な誓いとして、次世代にとっては重大な警告として、この記念碑はドイツ人の愛国心、忠誠心、英雄主義の象徴です。私たちはドイツの未来を信じ、わが民族の復活に積極的に取り組みたいと思っています」¹⁸⁾。

碑文のみならず、こうした演説からも第二次世界大戦の足音が聞こえてくるようである。しかし、結果はかの前市長が思ったようなものにはならなかった。1944年の空襲で聖ヨハネ教会は破壊され、あたり一面焼け野原となった。そのなかで、記念碑は奇跡的にわずかな損傷を受けただけで済んだため、再建された教会を背に戦後も同じ場所に立ち続けることとなったが、無論、戦前とは状況が異なる。『記念碑史資料』によれば、1951年の段階では、「こんなものがまだ残っているのか! […] 我々に必要なのは平和だ。徒歩傭兵ではない!」¹⁹⁾という記者の声が新聞にもストレートに表現されていたほどである。ところがその後の奇跡的な経済的復興で「過去の克服」は曖昧になり、「こんなものがまだ

…』といわれたままの姿で時が過ぎていくことになったという。その状況に変化の兆しが見えたのは、1979年のことである。国際反戦デー（9月1日）をきっかけに、行動的な教区メンバーと兵役拒否者を中心とする平和政策情報センター（FRIZ）が「兵士」像撤去を訴えるアピールを発したことで、あらためて議論が始まることになった。

1982年の復活祭の折、ハールブルクの反軍国主義者たちは兵士像に世間の注意を向けさせようとして、碑文をブレヒトの文章で覆った。1951年、当時の西ドイツが再軍備に向かおうとしているときに、第三次世界大戦を危惧したブレヒトがドイツの芸術家や作家に宛てて書いた公開書簡からの引用文である。「偉大なるカルタゴは3度戦った。最初の戦争の後も依然として強大で、2度目の戦争の後もまだやってはいけた²⁰⁾。3度目の戦争の後、もはやその姿は見つけられなかった」。そしてその引用文の下、元の碑文でいえば聖書の言葉が記されているあたりに、「生き残った者は死者をうらやむであろう」という、核戦争を論じる際によく引かれたフルシチョフ（1953年から64年までソ連共産党第一書記）の言葉が付け加えられている。

同じ年の秋、FRIZは新聞で戦争記念碑の警告碑への作り替えを人々に呼び掛けた。警告碑（Mahnmal）とは、痛ましい出来事とその犠牲者のことを心に刻み、二度と同じことを繰り返さないよう戒めの意味を込めて建てられる記念碑のことであるが、世間の反応は薄かった²¹⁾。その後、『「兵士」：ハールブルクの戦争記念碑史資料』がFRIZの手で発行され、そのあとがきには、平和主義の観点から新たな記念碑が満たすべき条件も列挙されている（便宜上番号を付した）。

1. 軍国主義と狂信的国粹主義（とくに「祖国防衛」）の根元が示されねばならない。
2. 戦争犠牲者の死に責任のあるもの（彼らを殺した者たち）は告発されるべきであるという意味で、戦争犠牲者を追悼するものでなければならない。
3. 他の手段をもってする政治の継続としての

戦争というものは、何人もそこから逃れられない運命とみなされてはならない。むしろこの政治をあらゆる手段をもって防止するよう人を勇気づけるものでなければならない。

4. 第一次及び第二次大戦のような出来事を繰り返さないために、断固たる平和主義的世論を生み出さねばならない²²⁾。

つづけて次のように述べられている。

こうした要求にはもちろん抵抗があるだろう。保守派や軍国主義者は——市民的党派においてもまた、そして、まさにそこでこそ——「伝統」や「犠牲者追悼」という概念の陰に身を隠して、平和政策に導かれた再編成に反対する論拠を作り出そうとする。そうした人々の多くは、第二次世界大戦におけるドイツ帝国主義の政治を代表したり、支持したり、許したりたりしてきたのであり、今日にいたってもなお、この政治の帰結であるドイツの分割を受け入れることができない。同様に、反戦記念碑を受け入れることもできない。それは彼らにとっては「身内の悪口」なのだ²³⁾。

犠牲者追悼を責任追及とセットで考えている2つ目の条件も重要だが、とくに3番目で運命論と絡めてクラウゼヴィッツ的戦争観を真っ向から否定している点に注目したい。戦争の災禍を自然災害のように嘆いたり戦争の不可避性を運命論的に語ったりすることは珍しくない。が、そのことは、平和に向けた主体的活動を困難にする要因のひとつとみるべきで、これはいまなお真剣に受け止められるべき提言であろう。しかしまた、「兵士」像との関係でいえば、最初の項目も重要性を帯びてくる。「兵士」像の撤去が現実的選択肢として浮上することがなかったのは、2だけでなく1に関わる意識がはたらいっていたからであろう。

ハールブルクの2000人の若者たちと重ね合わされた兵士は、国家によって動員され、その政策のために命を落とすことになった犠牲者であるとともに、

他国や自国に惨禍をもたらした加害者でもある。つまり、「兵士」はその実相においては「少年」と重ね合わされる面を有すると同時に、それが果たした役割の面から言えば、当の「少年」に向き合い、その無言の告発を受け止めねばならない存在でもある。そして、その両義性は実際に戦場に赴いた者だけでなく、具体的あるいは精神的に「兵士」や「兵士」的なるものを肯定し、支援し、それと同一化してきた人々すべての課題である。そして、後続の世代も含めて、だれもそのようなあり方と無縁とは言い切れないとすれば、それはどこまでも課題でありつづける。そのためにこそ戦争記念碑は残される必要があったのであって、外部化され悪魔化された「敵」の像やたんなる過去の遺物としてではない。

とはいえ、FRIZの掲げる条件2は責任を追及しようとしているものの、その在処を外側にのみ求めているようで、かならずしも自省的とはいえないように思われる。しかし、他の3つの項目とあわせ考えるならば、けっしてたんに他責的というわけでもない。直接責任は厳しく問いながら、その背後にあるものについては——議論の余地も多く、直視するための心理的ハードルも高いので——一般的な政治的責任としてまとめるにとどめているというところであろう。実際、それに続く部分では、「伝統」や「犠牲者追悼」を隠れ蓑にして記念碑に手を加えることに反対する人々として、保守派や軍国主義だけがやり玉に挙がっているのではなく、市民的党派/ブルジョワ陣営 (bürgerliche Parteien) も際立たせられている。「第二次世界大戦におけるドイツ帝国主義の政治を代表したり、支持したり、許したりしてきた」人たちにとって、「反戦記念碑は身内の悪口」だというのである。

さて、こうした活動の甲斐あってか、1985年にFRIZは戦争記念碑から反戦記念碑への転換を前提としたコンペを行うことを文化委員会から求められている。当初は学校の生徒や若者からアイデアを募ることが検討されたのであるが、入賞した案も実現可能性に乏しかったことから、最終的に地元の芸術家ヘンドリック・アンドレ・シュルツに依頼することに決定した。そのプランは「兵士」像に加えてブ

ロンズ製の「嘆きの子ども (Trauerndes Kind)」像を設置することで補完を図ろうとするもので、像の引き渡しは1988年9月に行われた。「ハールブルクの人々が考えるきっかけとしてこの記念碑を受け止め、受容することが期待される」と聖ヨハネ教区のライナー・フィンク牧師は述べ、それを受けて、新しく作られた小道には碑文を刻んだ石板が二枚埋め込まれた。一方には聖書の詩文「遠くにいる者にも近くにいる者にも平和を」(イザヤ書57章19節)、他方には、「我々は戦争犠牲者を悼むことから平和への道を見出さなければならない」と記されている²⁴⁾。

その場所の現状が【図5】【図6】である。夏場は木々が鬱蒼と茂っていて見難くなるが、冬場はすっきりした風景となる。これで首尾よく「戦争記念碑」は「警告碑」に作り変えられたことになるのか、それともそうは考えられないのか、あるいはそう単純にきめられる話ではないというべきなのか、節をあらためて検討することにしたい。



図5 「嘆きの子ども」と「兵士」全景1 (2023年10月)



図6 「嘆きの子ども」と「兵士」全景2 (2022年6月)

3節 「嘆きの子ども」像がもたらすもの

「兵士」像に「嘆きの子ども」像が加えられたことで、その場所の構図は一変する。ただ嘆き悲しむことしかできないその子どもからは、声なき声が、「なぜ」「どうして」という叫びが聞こえてくる。無辜の犠牲者たちの象徴としての子どもの存在は、その悲劇をもたらした者を召喚せずにはいられない。そのとき、傍らで高みに立ち、少年の姿など目に入らぬかの如く遠望する兵士の勇ましさを雄々しさはもはや抽象的徳性の次元にとどまることはできなくなる。その逞しさは暴力の強大さとして、その肩に担がれた武器は理不尽な死をもたらす不吉な道具として、そして、その足取りの力強さはそこで踏みつぶされるものの悲鳴とともに捉え直されざるを得ない。祖国防衛の旗印のもと、撃退されて当然の者たちに鉄槌を下すというような既知の図式には収まらないもの、これまでなかったことにされてきたもの、あるいは、まったく知らなかったわけではないが、あえて見ないようにしてきたものが、明るみにもたらされる。



図7

さらに子細に見れば、子どもの周囲には多くの軍用ヘルメットが転がっていて、欠けたり、穴が開いていたり、埋もれたり、断片だけになったりしているものもある。その形態はさまざま、ある特定の国のものに限られているわけではない。つまり、子どもは決して近縁の者や自国の兵士の死だけを嘆いているわけではなく、すべての兵士の死を悼んでいるのである。そして、どの兵士もだれかの息子、夫、父親、兄弟、同胞等々であるからには、それは

すべての人々の悲しみと重なり合っている。

戦争記念碑の見えない部分にメスを入れて負の部分明るみにもたらし、もろもろのレトリックも含めた戦争賛美の仕掛けに機能不全を起こさせることによって、そこで用意されていた思考や感情の流れを変える、あるいは、あらたな気付きを与えたり忘れていたものを思い起こさせたりすることによって反省の回路を開く。そうした機能があらたに付け加えられた対抗的記念碑には求められているのだとすると、「嘆きの子ども」はその期待にそれなりに応えられているようにも思われる。しかしながら、関連文献をみるかぎり、この対抗的記念碑の評判はかならずしもよくない。それはなぜなのか。

もちろん、独立した芸術作品としての価値、造形性の観点からの評価などは上に述べたようなこととは別の問題である。そうした観点からすれば、たしかに意見の分かれるところであろうし、異論もあることはじゅうぶん予想されるが、聞こえてくるのはそのような批判ではない。そうではなくて、「兵士」像の巨大さや台座も含めたその目立たせ方に対して、子ども像は非力すぎるというのである。たとえば、ノイエンガメ強制収容所祈念館とハンブルク州政治教育センター編のガイドブックにはつぎのようにあり、他の文献でもしばしば引用されている²⁵⁾。

対抗記念碑は、「兵士」の高い台座の隣の茂みの間に建てられているが、その隠れた位置と控えめなサイズ——子どもの彫像はかろうじて等身大より大きい程度——のため、古い戦争記念碑の持続的影響を打ち消すにはほとんど役に立たない。

著者の一人であるクリンゲルによるもうひとつの戦争記念碑ガイドブックにも似たようなことが書かれている²⁶⁾。

注目すべきは、遺族の悲しみを反映した子どもの記念碑には、その大きさと位置取りのせいで、空間的に際立たせられた特大の「兵士」に抵抗する余地が乏しいことである。

「兵士」の力強く誇り高い姿は、郷土の人間だけでなく訪れた者の共感を呼ぶ面もあり（先のFRIZの提言1.に関わる側面）、その力を認めることから出発しなければならないのはたしかである。では、それを相対化するプロセスはどのようにしてはじまるのか。像が語るのではなく、むしろ語ろうとしないことの側から考えるなら、戦争のネガティブな側面を見せないこと、想起させないことが戦争記念碑一般の不文律である。額の包帯もまた、戦争の帰結を示すものというよりは、そのあとにつづく「にもかかわらず」という言葉を効果的に演出するための小道具であって、弱さではなくむしろ強さを印象付けるために利用されているにすぎない。結果として、ひとはそこに不撓不屈の精神を見て取ることになる。だからこそ、批判的な意味を込めてあらたに記念碑を制作する際には、そのルールを積極的に破ることがひとつの戦略になる。

「兵士」の力を削ぐために必要なのは、「兵士」像が忘れていて、あるいは、見ないようにしているもの——「大いなる目的」の陰で損なわれ失われていくもの、時に言及されることはあっても「必要な犠牲」ということにされてしまっているもの——を可視化することである。その際に目を向けられるべきは、強いものに対する弱いもの、大きなものに対する小さなもの、大人に対する子どもだけではない。過去に対する未来も重要な要素のひとつである。屈辱の歴史も復讐心も過去からくる。それを受け止め直すことは過去に縛られた現在には不可能で、未来から到来する新しきものが必要である。「子ども」はその象徴にほかならない。その子どもが「泣いている」。兵士に涙は要らない。悔し涙はあるかもしれないが、戦いの原動力に転化させられないような感情は妨げでしかない。しかし、悲しみは戦争において不可避である。傷つきやすさと脆弱性は人間の条件であり、「兵士」の陰にあって見えなくなっているのはそれである。したがって、求められるべきは「次の戦争ではけっして負けない」という報復主義的な強さではなく、弱さや傷つきやすさを人間的なものとして擁護し、戦争そのものを回避することである。

「嘆きの子ども」の非力さをかこつ論者が間違っていないのは、「兵士」像の力、その魅力を認めている点であり、正しくないのは、子どもの像の場合、「負けている」ことにおいてはじめてその機能が果たされることを見誤っている点である。無論、子どもが生い茂る草の陰で物理的に見えなくなってしまうようなことがあれば話は始まらない。だが、子どもがたんに小さくひ弱く目立たない存在であるということだけでその対抗的記念碑としての無意味さを主張することはできない。まさにその小さくひ弱く目立たない存在こそがこの世界で守られるべきものの象徴だからである。パースペクティブの転換なしに「嘆きの子ども」の悲しみは見えない。そして、そこから捉え直されたときにはじめて、「嘆きの子ども」はたんに悲しんでいる子どもではなく、戦争の意味、生きることの意味、世界の意味を問い直す起点として機能しはじめる。その動的プロセスは無数の問いとして現実化される。各々がその問いを受け止めることが、死せる記念碑 Denkmal を生きた思惟 - 記念碑 Denk-mal (シュプリンガー) に変え、終わることのない問いと答えの弁証法を起動させるのである。

4 節 「はじまり」の（不）可能性

記念碑との向き合い方に唯一の正解、ただひとつの「正しい見方」は存在しないが、記念碑が生きた記念碑としての意義を有するべきだとすれば、それは何らかの仕方で呼びかけ、刺激を与え、ある意味で「気に障る」存在でなければならない。それによって問いかけられ、促された者において記念碑の意味やメッセージを問い直すプロセスが始動する。しかし、いつでもだれにとっても記念碑の存在が問いや促しになるわけではない。「最初の一撃」は向こうからやってくるとしても、それはその働きかけを働きかけとして受け止める用意がすでにできている者にとってのみ妥当することではないのか。与えられるべきものをあらかじめ先取りするような構えが先立たねばならないのだとしたら、いかにして「はじまり」は可能になるのか。もしもそのように一定の感性や知識をあらかじめ前提しなければなら

ないのなら、記念碑経験はずいぶんとハードルの高いものになってしまう。対抗的記念碑研究の先駆者であるシュプリンガーは、記念碑と対抗的記念碑の関係についてつぎのように述べている。「片割れが、もう一方の隠していること、沈黙していることを目に見えるようにしようする際、[...] 両者を対立させる教育法は、より良い議論の説得力や学習能力、成熟した観察者の判別能力や決定能力を頼りにしている。[...] 実際、未熟な『ふつうの』観察者にはたいへい過大な要求がなされていることになろう」²⁷⁾。

感性や知識あるいはなんらかの能力であれ、前提となるものをどこか別のところで調達しなければならないのであれば、「過大な要求」というのもわからないではない。そもそもそのようなものを手にするひとつの方法として記念碑経験があったのだとすれば、自らが提供するはずのものを前提せざるをえないディレンマに陥るようにもみえる。しかしながら、そこに循環関係やディレンマをみるのは、個別的经验の完結性と閉鎖性を前提した見方を採るからではないか。ここでの対抗的記念碑の経験は、ふたつの記念碑の「対向」という契機を通してその個別的经验の閉鎖性を揺るがし、関係性の中でそれぞれの記念碑を再体験させることによってはじめて可能になるものなのであって、一定の感性や知識、能力といったものを決定的な仕方で前提するわけではない。前提と帰結という静態的・論理的関係ではなく、さまざまな連想や動機づけなども含めて、時間軸に沿ってひとつのプロセスとして展開されるダイナミックな関係をそこにみるべきであろう。

もちろん、反対側から論じることも可能で、確定的な前提が必要というわけではないにしても、なにもないところにゼロからすべてを立ち上げる魔法を期待することもできない。たしかに、通りすがりの人間に対しても自然とアピールし、考えさせる記念碑でありえたならば、それは理想的といってよい。しかし、その一回的かつその場かぎりの経験にすべてを負わせようとするのは無理があるのではないか。むしろ、なぜそこまで過剰な期待を単一の記念碑経験に寄せるのかと問わねばならない。いつ始まった

ともいえないような、いわば「分子的なプロセス」(メルロ・ポンティ)によって準備されつつあったものに明確な形を与えるきっかけを与えるのがアートであるとすれば、問いかけ、悩ませ、ときに苛立たせる記念碑もまた、過剰な期待と過小な期待のあいだで適切に位置づけられねばならない。

記念碑の経験は数多ある経験のひとつコマでしかないのはもちろん、都市の経験という意味でもその一部をなすに過ぎない。歴史は場所とつながっており、場所の記憶は個人の経験と結びつきながらより大きな文脈とも複雑に絡み合っている。ひとつの街で起きたことはその国や民族に起きたことを背景としているが、大きな物語は語られることのない無数の小さな物語、個別の経験と分かちがたく絡み合っている。そうであるとすれば、記念碑の経験もまた同様に、自己完結的にひとつの出会いの内部ですべてを説明し啓蒙できる(あるいはそうでなければならぬ)と考える必要はなく、むしろ「開かれた経験」としてその外部へと誘うものであることを重視すべきであろう。記念碑がひとつの焦点ではあるにしても、そこだけに問題を見出したりそこだけで課題を解決しようとしたりすることは、当の記念碑経験をそれ自身のうちに閉じ込め、結果としてそのポテンシャルを損なうことになってしまう。

記念碑を設置することを目的達成とみなすのではなく、それを一つの拠り所、プラットフォームとして生かしていくプロセスの「始まり」として位置づけることができれば、ヤングの指摘するような記念碑建立による想起の義務の放棄や責任転嫁にも陥ることなく、記念碑を生かしていけるはずである。もちろん、対抗的記念碑もこれからあらたに設置されるかもしれないユニークで啓発的な記念碑も、永遠に有効性と妥当性を発揮しつづけることはできない。ワイセンバークのいうように、「対抗的記念碑も過去に対する絶対的に没価値的な視点を与えるわけではない。他のすべての芸術作品同様、芸術家の依然として主観的で時代の刻印を帯びたパースペクティブが対抗的記念碑の造形にも流れ込んでいるからである」²⁸⁾。そのような意味合いも含めて、記念碑あるいは記念碑経験というものをそれ自体として完結

したものとしてではなく、開かれた経験、開かれたプロセスとして捉え直すことが求められているのである。

第4章 おわりに：記念碑教育学という課題

ここであらためて先に引用したシュプリングの記念碑および対抗的記念碑に対する懐疑に目を向けよう。両者の対話的關係についても、あるいはそれ以前に、まず出発点となる記念碑の問題性を理解することについても、高いハードルがあるということを経験し、記念碑あるいはその特殊形としての対抗的記念碑の有効性が疑問視されるということであった。そこでは未熟／成熟という対概念でもって記念碑経験に必要なものが表現されていたわけだが、それを読解能力として、ある種のリテラシーとして捉え直すならば、必要なのは、なにも知らない通りすがりの通行人に対する要求の高さを嘆くことやそれを理由とした記念碑経験の切り下げあるいは断念ではなく、むしろそのリテラシーを身に付けるためになにかができるかという教育学的問題設定であろう。それ自体が学ぶべき歴史的对象であるとともに、それを介して多くの事柄が開示されるメディアでもある記念碑の可能性に問かける作業はまだ十分なされていない。すでにある取り組みから出発するならば、ドイツにおける記念碑教育学(Denkmalpädagogik)の理論と実践、そしてさらなる展開可能性について検討するという課題がここから開かれてくる。

2章で紹介したバンクシーのドローイングはメディアで広く紹介されただけでなく、『歴史授業における記念碑』という本の表紙も飾っている²⁹⁾。また、同著者による『歴史授業で記念碑をテーマにする』というタイトルの補助教材には、米国やイギリス、オランダ、ドイツにおける記念碑撤去を取り上げた長文の新聞記事が取り上げられていて、引き倒されて港に投げ込まれるコルストン像の写真も掲載されている。各セクションには作業課題も付されているのだが、銅像の撤去・損壊の理由をまとめることや、そうした振る舞いが歴史への向き合い方と

して適切かどうか意見を述べるといったスタンダードな課題と並んで、引き倒された記念碑自身の視点から内的独白を起草するというユニークな課題もある³⁰⁾。この教材には対抗的記念碑もひとつの可能性として紹介されているものの、具体例に即した分析が欠けているのは残念である。このあたりは今後の課題ということなのかもしれない。

最後にもう一度、バンクシーのドローイングに目を向けてみよう。万人を納得させるものではないにしてもそこに緊張関係が描かれていることの重要性を先に指摘した。銅像を土台から引きずり降ろそうとしている人々と銅像とのあいだでピンと張りつめた太綱がその関係を如実にあらわしている。実際には銅像はあっけなく引き倒され転がされた末に港に放り込まれたのであるが、本質的な部分はまだなにも片付いてはいないといってもよい。BLM運動を含めて長期にわたる闘いや取り組みがなされてきているのは事実であるが、コルストン像が体現しているもの、その本体はそう簡単には倒れない。むしろ頑強に引っ張り返してきていると読むこともできるのではないか。過去の歴史への向き合い方、その遺産の引き受け方が問題になっているのだとすれば、そこに奴隷制擁護か反対かという一元的対立だけを見るのは単純に過ぎよう。公共空間における銅像や記念碑あるいは建物やパブリックアート全般の使命や機能などもあわせて考えるなら、上述の対話的關係をはじめとして、さまざまな可能性や課題について論じる余地があるように思われる。そこにはまた、問題のある人物の銅像撤去だけでなく、公共施設や通りの名前などなにかからなまでに「浄化」していくことへのオブセッション、その危うさのようなものについて考察することも含まれてくるであろう。そのような意味においても、バンクシーのドローイングの核心は、コルストン像にあるのでもなければそれを引き倒そうとする人々にあるのでもなく、それを観る者も含めた関係者全員の「あいだ」にあるように思われてくる。コメント欄の言葉には反するが、バンクシーは緊張に満ちたその「場」という課題をこそ描こうとしたのだと考えたい。

【注】

- 1) Young, James Edward, *At Memory's Edge – After Images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture*, Yale University Press, 2000, p.96.
- 2) ブリストルの博物館 M shed で開かれた展覧会「コルストン像：次はなにか？」のHPに除幕式の写真が掲載されている。<https://exhibitions.bristolmuseums.org.uk/the-colston-statue/>（最終閲覧日 2024年9月20日）
- 3) Wilkins, Henly John, *Edward Colston [1636-1721 A.D.] : A chronological account of his life and work*, Arrowsmith, 1920, p.20.
- 4) Robinson, Derek, *A Shocking History of Bristol: Swindles, Scandals, and Skulduggery*, Abson Books/Tangent Books, 1973/Revised 2022, p.66.
- 5) コルストンを含むブリストルの街と奴隷貿易の歴史については、井野瀬久美恵『大英帝国という経験』、講談社、2007年の、とくに第四章「奴隷を解放する帝国」参照。BLM運動やコルストン像倒壊との関連については、世界思想社のwebマガジン『せかいしろう』に掲載された井野瀬久美恵「ブリストルのコルストン像、引き倒される！」が詳しい（3回にわたって連載）。<https://web.sekaishisoshia.jp/posts/5389、5482、5485>（最終閲覧日 2024年9月20日）
- 6) アンケート結果の詳細は『「われらブリストル」歴史委員会報告書』にまとめられており、以下の説明もそれによる（報告書は以下の「われらブリストル」歴史委員会HPからダウンロードすることができる。<https://www.bristol.gov.uk/council/policies-plans-and-strategies/we-are-bristol-history-commission>）。この委員会は、ブリストル市長マーヴィン・リースによって2020年9月に設立されたもので、報告書には個別の意見も掲載されていて興味深い。たとえば、廃棄派なら、「この像は処分されるべきだ。像は本来、その像が描く人物を讃えるもので、この像をどこかに建てるのが公衆の利益になるとは思えない」（p.29）。展示擁護派だと、「像は賛美的であるのに対して博物館は教育的だ」（p.30）。展示の仕方も争点になる。「私は、この像を、その歴史全体とともに展示してもらいたい。コルストンがかつてなぜそれほど尊敬され、彼のために像が建てられたのか、そしてなぜこの像がこれほど物議を醸すようになったのかを説明してほしい。また、この人物自身の全容も説明してほしい。私は、すべての人間と同じように、彼も多面的で矛盾に満ちていたと思う。彼はたんなる慈善家でもなければたんなる奴隷商人でもなく、その両方だったのだ」（ibid.）。「コルストン像の将来」に関する結論部分では、銅像撤去が民主主義的なプロセスを欠いたものであったという問題点が確認されたあと、つぎのように総括されている（pp.33-34）。

意見の相違は、歴史を語り直すのに最もふさわしい場所はどこかという点である。大半の人は、市の博物館だと考えている。少数の人は、これは「どこかの博物館に隠す」のではなく、公共の領域だと考えている。また、台座の上は言うまでもないが、博物館に像を展示することは歴史を語る行為ではなく、むしろ個人を賛美することではないかと懸念する人もいる。博物館での像の展示、台座やそこに設置される案内表示（signage）の将来を

決める重要な原則は、これが「賛美」でも「消去」でもなく、コルストンと市の歴史を正直に語るものであるべきだということである。

- 全体としてはうまくまとめられている印象だが、当然のことながら立場を異にする人々もいて、たとえば「歴史を取り戻す」という名のグループは、「維持して説明する（retain and explain）」を旗印に、「われらブリストル」歴史委員会とは異なるスタンスでこの問題に臨んでいる。<https://historyreclaimed.co.uk/the-colston-statue-in-bristol-part-1/>、<https://historyreclaimed.co.uk/the-colston-statue-in-bristol-part-2/>（最終閲覧日 2024年9月20日）
- 7) 『報告書』p.41.
 - 8) Musil, Robert, *Nachlass zu Lebzeiten*, Reclam, 1936/2013, S.57.
 - 9) Koselleck, Reinhart, „Kriegerdenkmale als Identitätsstiftungen der Überlebenden,“ in Marquard, Odo/Stierle, Kahlheinz (Hrsg.), *Identität*, Wilhelm Fink Verlag, 1996.
 - 10) Wijsenbeek, Dinah, *Denkmal Und Gegendenkmal: Über den kritischen Umgang mit der Vergangenheit auf dem Gebiet der bildenden Kunst*, Martin Meidenbauer Verlagsbuchhandlung, 2010, S.12f.
 - 11) Springer, Peter, „Denkmal und Gegendenkmal,“ in *Denkmal-Zeichen-Monument: Skulptur im öffentlichen Raum heute*, hrsg. von Ekdehard Mai und Gisela Schmirber, Prestel Verlag, 1989, S.92.
 - 12) 同上
 - 13) Uhl, Heidemarie, „Aus dem Lot.: Denkmäler und reflexsive Erinnerungskultur,“ in *Open Call: Handbuch zur Umgestaltung des Lueger-Denkmal, Arbeitskreis zur Umgestaltung des Lueger Denkmals in ein Mahnmal gegen Antisemitismus und Rassismus*, 2011, S.39.
 - 14) <https://www.ernst-moritz-arndt-gesellschaft.de/>（最終閲覧日 2024年9月20日）
 - 15) FRIZ, Friedenspolitisches Informationszentrum Harburg (Hrsg.) : „Der Soldat“: *Eine Dokumentation über die Geschichte des Harburger Kriegerdenkmals*, o. J., S.12.
 - 16) 同上 S.7f.
 - 17) Harburger Anzeigen und Nachrichten vom 27.Juni.1932.
 - 18) 同上
 - 19) Hamburger Volkszeitung vom 31.Jan.1951.
 - 20) プレヒトの原文では「住むことができる (bewohnbar)」だが、FRIZのパンフレットでは「やっつけられる (lebensfähig)」となっているので、そちらに合わせた。公開書簡全文は以下のデジタル図書館で読むことができる（最終閲覧日 2024年9月20日）。
<https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/QCTTWBZIGQPZTIWLTUFL63XAK5XLLYA6>
 - 21) 『記念碑史資料』S.14
 - 22) 同上 S.19.
 - 23) 同上
 - 24) Wijsenbeek, 前掲書 S.79ff.
 - 25) Garbe, Detlef/Klingel, Kerstin, *Gedenkstätten in Hamburg: Ein Wegweiser zu Stättender Erinnerung an die Jahre 1933*

bis 1945, KZ-Gedenkstätte Neuengamme und Landeszentrale für politische Bildung Hamburg, 2008, S.100.

- 26) Klingel, Kerstin, *Eichenkranz und Dornenkrone: Kriegerdenkmäler in Hamburg*, Landeszentrale für politische Bildung Hamburg, 2006, S.117.
- 27) Springer, 前掲書 S.309.
- 28) Wijsenbeek, 前掲書 S.270.
- 29) Dräger, Marco, *Denkmäler im Geschichtsunterricht*, Wochenschau Verlag, 2021.
- 30) Dräger, Marco, *Denkmäler im Geschichtsunterricht thematisieren*, Wochenschau Verlag, 2022, S.22.

【謝辞】

本研究の一部は JSPS 科研費 JP25580003 の助成を受けたものです。

